

ラガンダ第十一分所ラーゲルに収容された。

的にその任の遂行に努力されました。

昭和二十一年四月

スパーク療養所に入院。

(北海道 森 英一)

昭和二十一年六月

右療養所退院後、炭鉱で労働に従事、またコルホーズで野菜などの積み込み運搬作業に従事した。

## シベリア抑留記

滋賀県 小西 信太郎

昭和二十三年十月二十九日 遠州丸にて舞鶴港に上陸

復員する。この間三年三カ月の抑留体験をされた。

## 出生から入宮

現在の北洋銀行紋別支店に就職する。

昭和二十九年

結婚して三人の子供に恵まれ、幸福な生活を送られる。

昭和六十年

右銀行を定年退職された。

平成元年

全抑協札幌支部に入会する。

平成三年

支部役員に推せんされる。以来、慰霊碑の建立事業及び慰霊祭の開催等に委員の一員として積極

私の家は貧しい紀州和歌山県日高郡南部より兄弟揃って近江の国に移籍、父小西信吉は現住所・滋賀県蒲生郡金田村大字長田九百九拾八番地に住みつき、土地も借地、母キヨの間に二男として生まれたが、長男は生後二カ月で当時流感のため死亡、両親は私を長男として、大事に育ててくれた。母は私の三歳のとき、和歌山に里帰り途中、連絡船に乗船中、船酔いがもとで健康を害し、肺を悪くして薬石の功なく、私の五歳のとき、この世を去りました。

そのころ、わんぱく盛りの坊主で、葬式の当日、悲

しさも淋しさもわからず、大勢の人々が来ていただいているのをうれしがり、川に魚がたくさん上ってくるのを捕まえるのに懸命で、出棺のとき、「こんな時に何してるのや」と、私を探しに来て、ひどく叱られたことを、いまだに記憶しております。

それ以後、親子二人暮らしで淋しい日々でしたが、父は、母の分の食事、洗濯、家事万端と、仕事一筋に頑張っていたことを思い出します。

父は、野鍛冶の職人として、偏人で、腕も自慢出来る鍛冶屋のおっさんでした。(仕事 名物鍛冶屋は日々に繁盛)

ここに、なつかしい昔の歌、村の鍛冶屋を書きます。「村の鍛冶屋」作詩作曲不詳。仕事の歌といえは「村の鍛冶屋」、「トントンカン・トントンカン」と鋸を打つ音。

暫時もやまずに鋸うつ響

飛び散る火花はしる湯玉

鞆の風さえ息をもつかず

仕事に精出す村の鍛冶屋

「兵營とは苦樂を俱にし、死生を同じゅうする、軍人の家庭である故に切磋琢磨して軍人精神を涵養し……」

〔軍隊内務令の一節〕

起床して就寝するまで一緒だと、否応なしに人間それぞれ偽らざる姿が分かるものである。

初年兵時代の空腹は忘れられない。一日演習で駆け回り、午後六時夕食、一人前の量では空腹を満たすことができず、午後九時消灯まで初年兵には寸暇もない、翌朝午前七時の朝食まで胃袋を補給する物がない。

北滿の春は早い。四月の上旬ともなれば、厳しかった酷寒の広野に「迎春花」をはじめ可憐な花々が美しく咲き乱れ、異国で春を迎える初年兵に束の間の慰めを与えてくれた。情勢が変われば、一触即発の危機をはらんでいる。

緊張の中に明日への戦に備えての猛訓練が続く。初年兵の一日は、六時の起床ラップで始まり、夜は九時の消灯ラップで終わる、寸暇なき一日であった。

兵にとっては、衛兵勤務も忘れることのできない思い出である。砲兵隊の守備範囲は、第一衛兵（勝山陣

地入口）と陣内衛兵所である。

北滿の冬は、零下三〇度を越えることが普通であった。完全防寒軍装に身を包んでの一時間の歩哨は、体の芯が凍る思いであり、寒さとのたたかいであった。

緒戦よく戦捷し、北京、上海、南京と敵の主要都市及び首都を占領した。これを背景に新兵教育も熾烈を極める。第五国境守備隊の任務は、陣地に在って敵の侵攻を阻止し、後方部隊の進攻を容易にする任務であった。ここは北滿最果ての地、春立つ四月興安嶺に残雪は深い。五月北滿の春は決河のごとくやって来る。雪解け水を集めてアムール川の流が早まるころ、現地教育は終わり、第六九四部隊としてソ満国境守備の任につく。対岸ブラゴエシチェンスクを動哨するソ連兵も望見できるここ勝武屯勝山（哈大揚監視所）勝山陣地構築に従事する。

勝山とは、日本名で黒河から四百キロぐらいに位置し、黒龍江「アムール」川をはさんでソ連と対峙する最前線で、三百メートルぐらいの小高い山に陣地を構築して勝山陣地の築城と連日の猛演習の激しい守備訓

練の毎日でした。

#### ノモンハン事件

このころ、昭和十四年五月、ノモンハン事件発生。

ソ満国境では昭和十三年の張鼓峰以来緊張が続き、北進を意図する関東軍は対ソ危機に備え国境紛争要綱を全軍に布達した。

昭和十四年五月十一日、外蒙古と満州ハルハ河で、外蒙古軍と満州国軍が衝突した。日本は日満議定書で満州国の国防の責任を負い、ソ連は相互援助条約で外蒙古に対し同じような立場にあったころから、兩國激突の危険をはらんでいた。満軍敗走により直ちに関東軍が出動したが、五月二十八日、東中佐の指揮する騎兵連隊全滅に近い打撃をうけ、更に六月十八日、ソ連外蒙古軍が後方の戦略拠点を爆撃したことから、関東軍は徹底的反撃の作戦を立てて、大本營の反対を無視し、六月二十七日タムスクへの大空撃を決行、つづいて七月一日から地上作戦に突入した。ソ連軍は第一次大戦の英雄シュエーコフ將軍指揮の大兵力で、日本軍の約五倍に近く、我が軍は第二十三師団一万五千余の兵

力で死闘を展開したが、ソ連の新型戦車軍に対し、火焰ビンの肉薄攻撃で、戦闘のたびに死傷者が続出した。

八月十日に新たに第六軍を編成、全満州から飛行機、戦車を動員、ホロンバイル草原を鮮血で染める激戦のすえ、八月末には小松原中将指揮の第二十三師団がほぼ全滅、戦死者八千四百余にのぼる大敗北を喫した。

独ソ不可侵条約成立による情勢の急変を機に、休戦の方針を定め、両軍の代表により、九月十五日、停戦協定が締結されたが、ノモンハン事件は、日本にとって初めての本格的な対ソ戦であり、近代装備の立ち遅れを明確に示しており、急遽、対戦車砲の開発と、装備の機械化、近代化をそそぐに至った。ホロンバイル高原を血で染める一幕であった。

私の隊よりも転属され、犠牲者を出し、本当に悲しい思い出でいっぱいでした。

#### 新京鞍山新設部隊に転属

酷寒零下三〇度、熱砂の夏、昭和十七年六月新京鞍山製鋌所第十勤務隊要員として、生産向上、警備作戦で転出する。苦楽を共にした勝山陣地の戦友との別れ

は本当につらく、命を共にした戦友との永い間の別れで、次から次と涙がほほをつたって男泣きが続いた。

淋しさをぐっと我慢し気分を切り替え目的地に足を運ぶ、勝山での思いでは一生忘れられない気持ちを残して互いの無事を祈りつつ別れを告げ、気分を新たに持ち直し、昭和十六年七月、関東軍特殊演習（関特演）が下命され、当時の苦労したことを思い出し、次から次と走馬灯のごとく脳裏に浮かんでくる。久しぶりの旅で体も疲れ、知らず知らずに寝ていたらしい。……よほど緊張していたのだろう、ぐっすりと寝込んで……目が覚め、間もなく鞍山に到着するや、直ちに鞍山編成部隊の係に申告し編制を完了す。（昭和十七年五月三十日）

昭和十七年六月一日、第十勤務隊に転属、第四五四部隊に配属。

第十勤務隊第四五四部隊第五中隊の人事係を拝命、生産向上と警備を兼ねた第一歩が始まりました。鞍山の製鋳所は東洋一と言われる。規模においても、ここで働く従業員が十万人とのことで、初めて見て驚きま

した。我々の兵舎は社宅を臨時に開放した住宅で、地方人みたいな感じでした。兵員は、元国鉄の蒸気機関車の運転手、自動車運転、修理、動力、すべて技術の兵ばかり。

日増しに勤務も慣れて、六カ月たって部隊長、担当者よりの説明では、生産も日がたつにつれ協力の成果も高揚された由。鉄の原料鉱石は、タイコ山という山脈に、貧鉱ではあるが、三八%程度の鉱石が無尽蔵にあるとのことで、さすがに驚嘆いたしました。軍事訓練も厳しく、装備も三八式歩兵銃で、ちょっと私も砲兵隊ですので演習もとまどいましたが、勉強させられました。

昭和十九年三月五日十時ころ、アメリカ軍B29の爆撃機が鞍山上空に現れ、サイレンが鳴り響き、十五機の編隊で梯団第一、二、三、と一定の間隔を保ちながら、一万メートル余の高度で銀翼を輝かせゆうゆうと飛行し、我が軍は要撃する飛行機は一機もなく、腹立ちと悔しさでいっぱいでした。その日の攻撃は奉天方面の爆撃と聞く。

## ソ連対日宣戦

昭和二十年八月八日、突如、ソ連軍はアメリカ軍の優勢を見極めて、日ソ不可侵条約を無視して、対日戦宣戦を布告、ソ連軍は満州国へ侵攻、黒龍江を渡河し、砲撃戦車を連ね攻撃し、国境での守備はあったが、優勢の中に、満州侵攻一週間ほどのうちに、全満州のほとんどをソ連軍に占領されて、満州にある戦利品を大型トラックで運び出させる毎日でした。邦人居留民の苦勞は筆舌に尽くし難く、中でも開拓団の人々は路頭に迷い、あるいは子供を中国人にあずけ、詮方なく、逃亡中に我が子を自分の手で殺すという無惨な状況であったと聞く。当時、関東軍七十万（一般邦人若き男子）シベリア及び中央アジアに労働力として全員「強制抑留」された。

昭和二十年八月十五日

日本が降伏したことを知らされ、半ば信じられなかった。大隊本部よりの連絡を受けて驚き、しばし茫然、半信半疑の気持ちでいっぱいでした。

無条件降伏、終戦の詔勅、正に悲哀と落胆、そして

何物かに爆発させたいような憤怒と……。

無条件降伏が発表された昭和二十年八月十六日の翌朝、町には至る所、一夜のうちに青天白日旗が一斉に掲げられ、びっくりしました。

満人の表情もガラリと変わり、全てが十五日を境に一瞬にして立場が入れ代わり驚きました。

また、かなたこなた一部に満人の暴動、略奪などが始まったと聞く。二元警察官、憲兵らはどこへとなく逃げており、治安は乱れていった。

怒濤のごとく進撃し、国境での激戦の地区もあったようですが、重戦車、自動車、ソ連軍機械化部隊の前には何もできず、白旗を捧げた日本の兵隊がどことなく集結させられるのを見て、本当に情けなく死にたい気持ちでいっぱいでした。

毎日毎日轟音をとどろかし、アメリカ製のトラックに自動小銃を持った大きな体の連中が次から次と、砂煙を立てながらどこへとなく疾走する。

大きな体の警備兵がどこかかと自動小銃を構えて住居に侵入し、言葉が通じないが、やっと手真似で時計

ということが分かって、手当たり次第に略奪が始まった。全部手にはめ又は図囊に入れて早々に引き揚げて行く。入れ代わり立ち代わり、第三、第四の侵入者が訪れ、警備隊が入れ代わり、その度に新手の侵入者が訪れた。感心に昼間は一人も来ない。さながら夜盗の類か、服を取られ、万年筆、双眼鏡、図囊、身の回りの品は、第一日で取り尽くされてしまった。不安と憤怒の第一日は過ぎた。

一人の将校は、とられまいとして抵抗し、ついに窓外から拳銃で射殺された。

第十勤務隊の本部付きになった私に、本部に來たソ連軍の將校が編制表を副官に早く提出するよう通訳を通じて要求されるも、中隊長以下逃亡している隊があり、書けなく、本当に困りました。早く早くと拳銃を突きつけ、「ダワイ、ダワイ」と恐ろしい顔付きで、通訳に話すと今日中に提出せよとのことである。

#### 武装解除

通訳を通じて一カ所に集結、武装解除。たちまち我々の部隊の周囲、要所には自動小銃を手にしたソ連の監

視兵が取り巻き配備につく。

日本側とソ連側との通訳を通じて交渉が続けられ、副官より彼らの命令を伝達される。

1、將校は拳銃、軍刀(後で各人に返すからと……)  
名前を記入して付けるよう指示)

2、下士官、兵は拳銃、刀、帯剣

3、その他、小刀、刃物一切

以上の物を指定場所に集結する。

日本人は元来正直な人種である。將校は我も我もと軍刀、拳銃、双眼鏡に名前をつけた。再び自分の手許に返って来る希望と喜びを感じながら……。

兵器の集結が終わると、各人ごとの身体検査が開始され、その間トラックによって例の兵器は無造作に積み込まれどことなく運び去られた。

夕暮れも大分深くなってから、無腰になった旧軍人の一団は、静かに街を迂回して集結地に、屠所にひかれる羊のごとく、隊伍を組み、指定場所まで皆しょんぼりした重い足取りでソ連の監視下に入る。なんだか急に情けなくなり、空腹と共に腹立ちにもなった。

突然後ろの方で銃声が聞こえた。二百メートルばかり後方を兵隊らしき者が逃げて行く。五、六名一緒にあって、銃声は、なお激しく鳴り、途中逃亡を企てた兵たちは、恐らく射殺されたのだろう。わずか五分ばかりで元の静けさに返った。ソ連警備のもとに正式の抑留開始の一瞬である。

「搾取のない社会をつくる」という思想から出発したはずのソ連が、日本人からその骨の髄まで搾取しようとした事実には、今更ながら驚きの念を深めた。

ソ連軍より通訳を通じて部隊本部に連絡あり、会社、倉庫、工場において、満人による盗難が横行、モーター、電気器具等の略奪があるため、ソ連で手が回らぬとのことと警備を担当するよう命ぜられ、トラックにも白いペンキでロシア語で新しくサイン、警備を託して、騎銃、拳銃、実弾を所持させ、当分の間とはいえ驚きました。

ある晩のことでした。警備中に満人が四、五人で倉庫の扉を壊して侵入したところを発見、威嚇射撃をして、直ちに本部に連絡、犯人はソ連要人に捕らえられ

ました。

ソ連の通訳（担当者朝鮮風）が話をしていることを聞き、満州には兵器がないのには驚き、逆に物資の豊富なことには、今更ながらびっくりしたとの言葉を漏らしておりました。ソ連も独ソ戦で国民は相当経済的に困っていたことを話していたことは、事実と思いついていました。

シベリア鉄道横断、抑留輸送

昭和二十年十月十日～十一月十三日

すし詰め貨車に、五十名が車両の中へ詰め込まれ、落ち着くまでがてんやわんやの大騒ぎ。まるで小学校当時の旅行の様子を思い出す。何とか自分の席が見つかり、格好がついたときは、夜半であった。これから何日、どこの地へ運ばれることやら、顔馴染みになったソ連の監視兵に片言のロシア語で聞いたら、ハバロフスク経由で東京ダモイ、東京ダモイとのこと。勿論、彼らの言うこと、半信半疑で聞いていた。

種々のデマやソ連軍の言うことがようやく嘘だと感じ始めた。それからの話は自然に、将校よりの話では

最低三年間は恐らく駄目だろうとのことだった。一口に三年とは言うものの、希望のない生活で、日数にして千日余りである。これを時間に直したら大変な数字になる。その間毎日をお粥とスープと黒パン一片で果たして生き抜けるかどうかだ。遊んでいても空腹を感ずる給与状況である。まして貨車に揺られてのことだ、労働しなくても、カロリー不足でまいってしまうのではないかなど、心配と不安は後も尽きない。

時には半日も停車したり、走ったり、どこを走っているのか駅にでも着かないと見当もつかない。ようやく乗り物疲れが出て来た車内には、小便の設備はあるが、大便の設備が無い。よって生理的現象の起こった者、停車を待ち構えて用を足す。停車しても何分停車かさっぱり分らない。用便の途中で発車の笛が鳴り、あわて、下着を捲くり上げながら、顔色を変えて飛び乗って来る者もあった。

この場合びっくりしたのはソ連の子供たちである。一列横隊線路に沿って放列の真っ最中に、車輪の下から背後に回り、首にかけて刀帯やバンド、物入れの中

の手袋、半片など、手当たり次第にかっ払って逃げて行く。片方、用便の最中で追うわけにもいかず、ほとんどが泣き寝入りだった。

先々の思いやられる子供たち、この子供たちが大人になったソ連国は、今よりも、もっともつと恐ろしい国になるだろう……。汽笛が鳴り、やがて汽車が出る。扉を開けて下を見ていくと思いいの黄金の山が行儀よく一列に並んで、さながら出来立ての饅頭のようにだ。シベリア横断唯一の日本人の置き土産である。ソ連の豚はますます肥えて味も良くなることだろう。

毎日、毎日、貨車の中で、どこへとなく輸送の明け暮れで、何の楽しみもなく、時には二時間ばかりも停車したままのときもあり、体の方も、食べ物も十分でないから、急に長い輸送に体の衰えを感じた。ダモイの念願は頭に残るのは事実で、気分を持ち直し、互いに励まし合う結果となる。早く落ち着いて横になりたいばかりが心を忙しくする。また、どんな作業が待っているのやら、やがて待ちに待った不気味な音を立てて汽車は止まった。

前方より輸送指揮官が回って来て、下車すると命令

された。重いリュックサックを背中にしよって、重い荷物を欲張って隊伍を組み歩き出した。駅の周辺の民家の煙突から煙が盛んな勢いで舞い上がっているのが望見できた。ここはウズベク共和国のタシケント。ウズベク共和国首都タシケントは七十万都市で、シベリア鉄道輸送から開放され、例の石畳のガタガタ道を疲れた足を引きずりながら腰に飯盒と空缶をぶらさげて、四列の隊伍を組み、ソ連兵の監視のもとにやっと目的地へ。古びれた汚れた建物に大門を開き、今度は五列に隊伍を整え入門する。ソ連の将校が二、三人、出迎えるため制服に身をまとい、長靴をはいた大尉級の襟章をつけた厳格を保ちながら、人員の点呼をする。

建物の周囲は、鉄条網が三重に張り巡らされ、四隅には監視の高台が聳えているのが望見できた。囚人収容所跡の感じがした。

目色の変わったソ連人たちが、柵の外からさも珍しいものでも見るようにじろじろ見ていた。

しばらく後、身体検査や装具の検査があり、抑留生

活が始まった。

#### 収容所抑留生活

まず便所に行つて驚いた。厚い板に穴があけてある。二十五カ所、前後に五十カ所向かい合つて用を足す。話をしながら、御気張りやすの真っ最中。初めは嫌な感じだったが、別に気にしないようになり、互いに話を交わしながら、また煙草を吸いながら、用便の一こまで、収容所だけで経験できるものでした。やがて、建物の中に入り、はじめした薄暗い部屋へ、上下二段の丸太で組まれた床板が敷かれ、そこに詰め込まれ、やっと落ち着く。

少し時間を置いて広場に集合の連絡があり、外に出ると、はやソ連の監視兵が四隅の高台に自動小銃を手にして立哨警備していた。長い輸送途中で死亡した者も数多く、やっと命を取り止め、互いに励まし合った友達と共に喜び合った。

人員点呼を今までは隊伍を四列だったが、ここに来てからは五列に並べて勘定する。人員の点呼においても、三、四人で数を調べ、皆よって数字を出したら三

人三様の変わった数字が出た。顔同様に知恵も不足しているらしい。ようやく点呼を終了し、収容所長の訓示があり、朝鮮人ふうの通訳を通じて説明される。

また、レポート(労働)のノルマを達成するよう、煉瓦造りの作業について若干の説明あり、当収容所は第五(ラーゲル)で、自己紹介マリニコフ大尉で、収容所長であると、思ったよりも厳格な口調でロシア語で訓示した。

#### レンガ造り作業

今日より作業に、工場で煉瓦造りで、三交代で八時間労働が初めて経験する仕事でした。

朝食、粟のスープ、一日三百五十グラム黒パンで朝食を済ませ、工場まで一キロ余りを毎日往復監視付で作業が始まり、慣れない仕事で、煉瓦造りの仕事は広い工場内で、ソ連の係員の説明でノルマの達成一〇〇%は高度の達成はとても程遠く、やってみて五〇%ぐらいしかできない者が多い現況でした。窯より出す焼いた煉瓦を、タチカという一輪車に一人で積み込み、挟い鉄板の上を積んで運び出し、広場に積み、一日一

人三千六百枚を運んで百%という数字でした。

とても重労働、車に百枚積んでも、三十六回往復するので、中には一輪車が脱線して、煉瓦が落下して傷つき、係員よりひどく叱られる者が度々でした。結局、少なく積み、回数を多く運ぶのがよく、また生煉瓦の場合でも、日光乾燥場の棚より一輪車で窯に入れる作業で、百%のノルマは、生煉瓦は重いので一人二千六百枚、これも到底達成は困難の数字でした。

煉瓦造りの土は、裏山に穴をあけ、中に爆薬を入れて爆破して、トロッコに積み込み、土を運び込み、また、土が碎土器で粉にされコンベアで水を加え練り上げ、羊かんを切るように四枚ずつ切って、それを二枚ずつコンベアに流し、流れて来た煉瓦を乾燥棚に十人ほどで次から次と運び、八時間労働で休む暇もなく続けられる。寒い日はひどく体に無理があり、きつい労働でした。

慣れない作業で、再三所長よりノルマ達成ができないのでひどく叱られ、食事の方も減食され、ますます苦しい状態が続きました。栄養失調者も増えました。

食べることだけが頭にあり、餓鬼道の哀れな日々で情けなく、一日も早く帰る日を空を眺めて祈る心でいっぱい、慣れない作業に互いに励まし合って生活が続いた。

バーニヤ

久しぶりに町に入浴する知らせがあり、風呂に入れると皆活気づき、ロシア語で、バーニヤ。ソ連の監視兵もヤボンスキー、ハラシヨバーニヤ、と言ってアンペラの上に衣類を脱ぐように指示、五十名単位で、一人一個ずつのリングが渡された。着ている衣服は穴を通して全部リングにかける。裸体のままで消毒係員のマダムが消毒室に入れ終わると入浴だ。久しぶりの入浴に心楽しく入って見たら、小さな桶に八分目のお湯と、二センチ四角くらいの油臭い石鹸の配給があるだけだった。浴槽は勿論なかった。最後の水を洗い桶に一杯くらい配給されてオーライである。中には全身に手早く石鹸を塗り、後で泡を落とすのに大騒ぎしている連中が多かった。てんやわんやの内に終わって、消毒室から出てきたリングは火傷するくらい熱くなって

いて、長らく悩まされた虱も全部死んで、薄汚れた衣服ながら蚤と虱が一匹もいなくなったのが唯一の収穫というところか。聞くところによればソ連の入浴はほとんどがこの式だとのこと、一年ぶりの入浴が、シラミ殺しが何よりだった。

仲間の者もだんだん日付きが陰しくなっていた。食うことで口争いの起こる場合も出てきた。いつまで続く生活かshれないが、何だか今から憂鬱だ。

抑留生活中何よりも一番うれしかったことは、私の戦友で中村上等兵、召集兵で私よりも三歳上で、元理容師で暇を見ては、いつも散髪をしてくれて、ほんとうに助かりました。入浴も一カ月に一回ぐらいで、空き缶をストープにかけて湯を沸かし、体をよく拭き手入れを励行したので健康につながったことが大きいと思えました。蚤と虱、南京虫には悩まされ、どうすることもできず、生水だけは飲まず、必ず沸騰したお湯を飲むよう励行しました。

夜間は特に照明も不十分で労働に一苦勞。八時間の労働は、体にこたえ、更に寒さが加わり、生地獄で、

異境の空を眺めて無事を祈る外に何もなく、寒さのためには体を動かす外に何も無い。そういう日々が続く、友人の中には労働ができない人も日があつにつれ多くなつた。

身体検査でソ連軍医（ドクトル）が木のラッパの聴診器を手にかけているだけで、手で尻の皮膚をつまみ、一級、二級、三級と、ラポーターハラシヨと區別して、四級は収容所の雑役、中には栄養失調で亡くなる気の毒な友もあり、淋しさひとしおの感じてした。

入所して、いやな事ばかりが多い。ようやく二年がたち、作業の方もだんだん慣れるに従い、少しずつではありましたが、ノルマも係員並びに収容所長の訓示等で八〇％程度までになり、私は百％までやったことがしばしばでした。友人の分までやったこともありました。

ある日、この地は高所で、収容所の炊事場の近くにある井戸のバケツが切れて、炊事ができなく困っているとのことで、井戸を覗いて見てびっくり、深い、三十メートルほどの深さでした。だれもが困つたなど、

ため息をついているのに気の毒になり、バケツを取るため「よし」と、私は裸になって、命綱のかわりに綱で体をしばり、鉄パイプを握りながら、巻いた綱で下に降り、井戸の深さもわからなかったが、深い井戸は酸欠になると危険であることを承知しているので、ローソクとマッチを持って酸欠を中間で確かめ、異状がないことを確認して下に降りた。下より上をおおいで見ると、穴から空が小さく見えるだけだったが、気を付けないがようやくバケツを拾い、綱に縛りつけて、上の人にOKの合図をして引き上げてもらい、上に上りやれやれ。地上では皆喜んでくれて何よりも嬉しかった一幕でした。

炊事班長よりも、「済みません」と言われ喜んでくれた。

私は、作業でも、小隊長でやらなければならない責任感でつらい立場でした。

鉄工技術は私は溶接、鍛接、瓦斯溶接等は専門ですが、調査のときでも何も知らないことにしていた。技術者には金子もくれることはわかっていたし、ソ連の

技術者が余りないので困っているのも承知してました。収容所内でオルグの政治教育にも参加しないので、反動分子と言われたこともありましたが、困ったときは、いつも相談され、同友のためには、一生懸命に努力しました。ロシア語も国境守備隊の下士官の教育で単語を教えられたので、少しはわかるので便利でした。

ある日、ソ連の将校に「スタルシナ小西、ダワイ」と呼ばれ、ソ連兵のコックが病気になったので、しばらくの間コックをやってくれと言われ、承諾することにしました。ソ連の監視兵とも顔なじみでしたので信用してくれたのだと思いました。

当収容所に一人ソ連兵と共に起居していたドイツ軍の抑留（ゲルマン）軍人の兵十が日本馬をつかって糧秣受領をする作業をしておりましたが、ある日、馬が暴れて馬車共に投げ出され、大怪我をしたので、日本側の隊長に馬を扱う者がいないかと、通訳を通じて隊長に出してくれと言われた。隊長も私が馬を扱うのを承知しておられるので、コックと馬の取扱いを承諾し両方をやることになりました。

作業小隊長の方は外の軍曹が担当し、私は一週間に三回、クシケントの町のパン工場へ、ソ連主計（インチェンタント）と自分の間ではありましたが、糧秣受領に行き、作業としては楽な方で助かりました。馬が恐怖症で暴れるのには十分注意し神経を使う毎日でした。その作業を四カ月ほどやっておりました。主計ともいつも一緒にタバコ「マホルカ」などくれました。

#### 初めての営倉入り

入所して初めて便所に行ったとき、何のかいもないのに驚き、また厚板の穴より下を覗いて深いのに驚いたが、二年半の歳月がたつと、間が三十センチぐらいしか空いてなく、満杯になり、塵も積もれば山となるとはこのことだと思いました。ある日、近日中にソ連のお偉方の巡視があるということで、当収容所係の衛生の将校が見見をして、便所を汲み出すように日本側隊長に通訳を通じて連絡があり、早速にソ連側より汲み取り用のタンクが支給された。私に汲み取りを命ぜられ、馬車で収容所裏山の大きな穴場に捨てるようにと。三日目の出来事でした。馬が何かに驚き、後び

きしてアツと言う間に車ごと穴にはまって帰れないので、収容所に帰り応援を要請。隊長を初め同僚十人ばかりが駆けつけて、ロープで縛り上げ、苦勞したあげく、ようやく馬を助け出してどうにか命を取り止めた。したが、足を怪我しており、苦しまぎれで汗びしょり、びっこをひいて、その責任を問われて営倉入り。びっくりしました。ソ連では厳しく罰せられました。

食事は差し入れてくれました。

一晩中寒さに弱りました。初めての営倉入りの体験でした。いつまで入れられるのかと本当に情けなく出所を待つのみでした。

翌朝、ソ連兵よりダワイと鍵を開けてくれ、やっと安心した。日本側の隊長、同僚たちも心配そうに私に同情の言葉をかけてくれ、労をねぎらってくれて、何よりも嬉しく感じました。

馬が一日も早く快復するのを祈る思いでいっぱいでした。

私は、抑留生活中、終始作業にも良心的に働き、また同僚よりも親しまれてきたことは、健康につながり、

よくここまで倒れもせず、生活出来た喜びは、人のいやがる汚い仕事も一生懸命やったお陰であると、いつも感謝で過ごしたことが私にとって励ましになったと一人喜んでおりました。

強制抑留奥地の森林伐採、炭鉞作業、鉄道修理、農場作業等で、冬季気温最低零下五〇度という酷寒と、防寒被服も十分ならず。食糧も一片の黒パンと粟、高粱の雑炊、スープは馬鈴薯一つ二つの岩塩汁。それもソ連警備兵の横流しが激しく、労働はノルマ制で、その成績次第で食事も上、中、下が定められる。従って、餓寄せのすべては体力の弱った者に回ることとなり、ノルマが上がらない、食事が減るというわけで悪循環を繰り返して、ついに栄養失調症で倒れる。収容所によって異なるが最悪の所ではその半数が死亡した。

夏季には、食える草はみな食った。長い長い冬の終わる五月の中旬になると黒い土が現れて、タンポポの若い小さな芽が出る。それを掘り起こして、芽はもとよりその根を、少し苦いが噛みこんで空腹をやっと凌いだ。また、ソ連の家庭の残飯桶を豚のように探し求

めた。

実に「地獄図絵の餓鬼道さながらの様相を呈した」のであった。

### 国際郵便

年の暮れ、通訳を通じて日本人隊長あてに、手紙を出せると連絡があり、この時は嬉しいやら心配やらで複雑な気持ちだった。捕虜の手紙が村に配達されたら恥だという説と、出しても果たしてソ連が正直に日本向けに発送するかどうかということも心配だった。そのうち葉書が一枚ずつ配られた。なお、今後も引き続き出せるようになるだろうとのこと、我々は結局早く内地に帰れるだろうと予想して見合わせることにした。約四カ月過ぎたある日、手紙の返事がぼつぼつ来だした。実際に発送してくれたのだという信頼感がこの時ばかりは感じられた。返事の中には、弟妹の死んだことや爆撃で家を焼かれたことや、奥様がまだ内地に帰っていないことや、悲しいニュースもあったが、中には子供三人を無事満州から連れ帰って、元気な主人の帰国を一日千秋の思いで待っているというような嬉

しいニュースも伝えられた。これを見て今度は出してやろうと思っていたら八月十五日再び葉書が配られた。ちょうど内地はお盆の十五日だ、これも何か先祖の引き合わせか。生活内容は勿論書けないので、元気でいることだけ書き、送った。今度は返事を持つのが楽しみになって、毎日の作業も大して苦にならなかった。

九月末となったがなかなか返事がこない。そのうちダモイ近しとのニュースが入ってきた。真偽の程は勿論分からないが……。

私の収容所の組の同僚が右手を作業で痛め手紙を書けないので、私が代筆で書いてやろうと言いましたら早速喜んでくれ、東京都の品川区の人で、言われるままに、内容は元気でいると簡単な文句で書きましたが、手首をやられ、大変に不自由なので、帰国しても気の毒やと思う心でいっぱいでした。

しかしながら、そんなことは知らず、家族には元気でいるとだけを書きましたが、心の中で私は泣けてきました。奥様や子供さんは何も知らないことです。私はいつも出来得る限り戦友の不自由をかばって

やったので、いつも喜んでくれました。書き終わって再び同友の顔を見て励ましました。

ダモイ

昭和二十三年五月下旬、ホットニュースが発表され、ダモイには条件があり、ラポート（労働）を積極的によくやった者及び進歩的な思想の持ち主であるものだけということだった。五月二十日になり第一回の氏名発表が次々と伝えられた。自分としても、ラポートは比較的良心的にやったつもりだと、半ば心配していたら、やがてハラシヨラポーター（労働をよくやった者）組の中に自分の名前が呼び出された。

その後は、まるで戦争のような騒ぎのうちに被服の返納、調査準備などあり、どうやらリュックサックをまとめ終わったときは夜が明けてしまった。早朝、残る同僚に別れを告げ門外に整列した。人員は二百名余りか、ソ連の収容所長が珍しく制服に身を整えて、おめでどうと挨拶を行った。真実に帰れるのかな、まだ半信半疑ながら嬉しさは隠し切れず思わず皆の口許がゆるんだ。

帰路の行軍は皆元気がよかった。来るときと違って途中でへたばる者が一人もなく、全く気分には左右されること甚だしいものだと感じた。今までは何事によらず狐と狸の化かし合いみたいなことばかりだったので、ソ連側の言動を信用しない癖がついていたため、今度の朗報も果たして真実かどうか船に乗って日本の土を踏むまでは信用できないと皆で笑ったが、四月二十五日、正式に予定通りダモイニュースが発表された。それから毎日厳密な身上調査が開始された。旧軍隊の所属や移動、本人の係累の年齢、職業に至るまで、まるで初年兵入隊当時以上の綿密さだった。

もうダモイと決定したので優遇？したのか、この間、珍しく作業らしいものは一回の薪取りだけだった。

約三カ年の抑留生活、よくぞ元気で過ごせたものと神に感謝した。残留同胞よお先に、タシケントさらばと心の中で祈る。

我々を運ぶ貨車が構内に入っている様子、最後の体及び装具の検査が始まった。余分の靴、ループル紙幣は皆取り上げられた。帰国するのだったら何もいらな

い、思い切りよく皆早くから諦めていたところだ。とにかく、早く車中の人となり、一刻も早く落ち着きたい気持ちだった。

大分外が暗くなって検査も終わった。貴重品を取られた者、うまく隠し終わった者など、悲喜交々のうち車内に入り、一応整理が終わったら皆ホッと溜息に似た安堵の声を漏らした。だれの顔にも今までよく体が続いたものだと感慨深げな表情があった。

一寝入りしたとき、ゴトンと汽車が動き出した。東か西か、東だ、東だ、思わず皆顔を見合わせ喜んだ。

途中の経過は来たときと大して変わりなく、例のお土産饅頭も前例の通りながら気分的には大変化があった。

途中一回シャワー入浴があり、ハバロフスク付近から沿線に日本人が見え始め、あちらから盛んに手を振っていた、随分いるようだ。僚友よりお先に、目で挨拶しながら、夜ともなればただ帰国の夢から夢へ。

約二十七日間走り続けて予想もなかったナホトカに着いた。目の先に港が見える。これが日本海に続く水か。懐かしさに思わず目頭が熱くなった。日の丸を

掲げた船が見える。日本の船だ。心中快哉を叫んだ。

ナホトカ

ナホトカに着く二、三日前から少数の進歩的分子より赤旗インターナショナルなどの歌を教えられた。この歌を知っていないと反動分子扱いされるとのことで、好むと好まざるとにかかわらず皆覚えた。下車して広場に整列、一回だけ食糧運搬のラポータをやって、ようやく収容所に案内された。ここでは旧日本軍の赤化兵十たちが抗ソ一辺倒で専横を極めていた。専らソ連のニュースを誇大宣伝していた日本新聞の記者と称する者たちがそれぞれソ連賛美の演説を行った。

この連中が、日本新聞を通じ、間接的に赤化指導工作をやっていたのかと、まじまじ顔を見てやった。中には頭の禿げ上がった元上等兵もいた。大体において将校はいなかったようだ。彼らも日本に帰ったら、果たして今の気持ちで頑張ってソ連政策の一翼を担うのだろうか。それとも在ソ間だけの御機嫌取りなのか心中を疑った。彼らはソ連軍並みの厚遇を受けて、さながら豚のように肥っていたからだ。朝の点呼から夕の

点呼と集合の度に、日米の政策を攻撃し、ソ連礼賛の  
一くさりを罵声と共に聞かされたのには全くがっかり  
した。彼らが声を大にしてアジ演説をすればするほど  
聞いている我々の方はますます馬鹿馬鹿しくなり、ソッ  
ポを向くだけだった。焦った記者たちの詰込教育の効  
果たるや、果たして何パーセントあったことだろうか。

七月十七日最後の服装検査も終わり広場に整列する  
と、これから復員式が行われるとのこと、我々は聞いて  
びっくり、全く開いた口が塞がらないとはこのこと  
だろう。日本に帰り復員省の手続を経て復員かと思っ  
ていたら、その前にソ連の復員式だと言う。ガラクタ  
音楽隊が五名居並ぶ中、いとも厳かにインターナショ  
ナルの歌を合唱。ソ連収容所長の挨拶で式は終わり、  
これよりナホトカの港に向かって前進が開始された。

## 帰 国

横付けにされた日本船にタラップが下ろされ、指示  
により乗船が始まった。ソ連の兵士たちも乗り込んで  
来るかと思つたが、港で人員検査をするのみで船には  
上がってくる気配はない。これで抑留から開放された

気分になり、ようやくどらの音を響かせ船は緩やかに  
港外へと誘導され始めた。港外に出るとソ連の誘導船  
もいつの間にか見えなくなり、日本船の自由行動となっ  
た。日本の船で日本に帰れるのだ。この時になり、はっ  
きり帰国できる喜びをしみじみ味わった。輸送船、船  
名は「興安丸」だった。

船は日本海に入り一応落ち着いたとき、復員省の係  
官が中央に現れて我々の無事を祝ってくれ、日本の現  
状について詳細に説明してくれた。懐かしい本日の日  
本の新聞や雑誌なども数少ないながら各班ごとに順次  
回覧され、皆食い入るように写真に見入っていた。

それらによると、ソ連の言っていた事が皆宣伝のた  
めのデマだと分かり、正常な思想を持った人たちによ  
り、次々とソ連内情の暴露報告が始まった。進歩的分  
子として今まで大きな顔をしていた連中は顔色もなく  
隅っこの方に小さくなっていった。

最後には罵声、怒号一しきり、だれからともなく天  
皇陛下万歳が叫ばれ、全員これに唱和して、一変して  
船内は感激と涙の場と化した。

第一日の航海も無事に過ぎていった。この船は舞鶴港行き、夜は演芸会が開催され、今までの暗い気分から急に晴れやかな顔、明るい声で歌やら浪花節やらで大騒ぎ、全く子供に返ったようなはしゃぎ方だった。

しかしこの反面、心の奥では各人各様に妻子や父母兄弟の消息に胸を痛めていたことは事実だった。笑い興じている同僚の顔にもそれが一抹の影のように目に入った。帰国の善び、肉親よりの再会、この筆舌に尽くし難い喜びの中にも、また私は帰ってもただ一人者、将来の生活の危惧の不安でいっぱいだった。しかし帰ったら何とかなる。捕虜生活の気持ちでやれば何をしてでも生活できる、こういう決意で頑張ろうと、この時より自身を励ました。

朝霧が晴れかかってくると島影がかすかに見えてきた。だからともなく、ただ万歳万歳の声のみ、顔を流れる涙を忘れたかのように叫び続けた。生還の喜びここに目的地を前にして全く感極まったと言える。

錨が投げこまれた。安心して見られる本土の風物、まるで極楽にでも行ったような感じだった。上陸のた

めの種痘や検診が開始された。船内の給与やサービスも十分とは言えないまでも至れり尽くせりの熱意がみられたのは嬉しかった。

就職の話も持ち込まれ、電報も無料で一通だけ発信してくれるとのこと、皆鉛筆を握りしめ考え込んでいる。初便りを何と知らそうか、嬉しさに迷っていたのだろう。

船内四日間の復員手続も終了し、いよいよ上陸だ。何だか心持ち足が震えるのがどうしようもなかった。荷物を背負いタラップを元気に下りる。米式のDDTで体中臭っ白にされ税関検査も無事終了、ロシア文字のものは一切取り上げをくった。衣服を支給され、帰郷旅費も支給され。

何も無いと宣伝されていた日本に、昔どおり豊富な品々が町の店舗を賑わしていたのには、びっくりすると共に安心した。

当地は爆撃も免れたのか、家並も揃い商店も活気を呈していた。久しぶりの夕食、日本ふうの湯に入り、日本人に立ち帰った。ソ連で縮めた寿命がようやく延

びたような感じがした。明日は帰郷だ、昭和二十三年七月二十三日胸中憂いや不安を一挙に解決できる日が出て復員列車の人となり、昔ながらの懐かしい安土駅に、午後一時、近所の人、友人、親戚の方々の出迎えを受ける。何も話す事なく有り難う有り難うの連発だった。

家に着いて、荒れはてた我が家、明日からの生活が待っている。私は一人者、頭の中にはどんな苦勞にも負けぬよう、抑留生活でやればと、その時から決心がついていた。瞬間的に肝に命じ自分自身を励ました。

帰省後、警察官の試験を受験した結果、合格したはずの結果がソ連帰りとのことで思想的に警戒され不採用で、今更ながらソ連抑留の後遺症がつきまとい、情けなかった

### 【執筆者の紹介】

一、大正六年八月九日生

滋賀県蒲生郡金田村大字長田九百九拾八番地

一、村立金田尋常小学校昭和四年卒 同校高等二年卒

村立国民学校青年訓練所四年卒業

一、家業 野鍛冶並農機具の販売従事

一、昭和十二年徴兵検査甲種合格

一、同 第一補充兵

一、昭和十三年一月十日 臨時召集 京都野砲兵二十

二連隊に応召

一、昭和十三年四月 満州国関東軍第五国境守備隊黒

河省勝武屯第六九四部隊砲兵隊に入隊

ソ満国境守備 陸軍曹長

一、昭和十七年六月 新京鞍山第十勤務隊第四五四隊

隊編成 第五中隊、上級職内務係転属

一、昭和十九年 第四五四部隊 本部付

一、昭和二十年十月 ウズベク共和国 タシケント収

容所抑留

一、昭和二十三年七月二十三日 ソ連ナホトカク舞鶴

港 興安丸復員

一、復員後 家業 鍛冶職 溶接 農機具の販売従事

滋賀県近江八幡市長田町九百九拾八番地において

一、昭和二十七年 株式会社南製作所入社(昭和五十

年退社)

一、昭和四十一年一月二十九日 全日本銃剣道連盟

銃剣道 四段 証を受ける

職 歴

一、昭和五十七年十一月二十五日交付 ボイラー主任

者 資格授与 滋賀第一四七九号

一、昭和六十年六月二十八日 酸欠 危険作業 主任

者 資格授与 滋賀第一四七九号

一、全抑協近江八幡市会計並会長歴任

一、軍恩連盟近江八幡連合会副会長並会計歴任

現近江八幡市幹事

一、近江八幡市英霊にこたえる会会計歴任

一、市立金田小学校校友会現副会長

一、平和祈念建立事業慰霊碑寄附協賛

一、太平洋戦争戦没者慰霊協会会員

一、滋賀県連合会幹事拝命(平成八年六月)

誠に貴重な人材であります。

(滋賀県 大更 良三)

## ソンドラの墓

岩手県 及川 新蔵

私たちは横道河子で終戦を迎えた。持っている武器  
弾薬は全て一カ所に集められ、我々は丸腰になった。  
武器以外の物は雑のうと小さな天幕一枚、あとは夏衣、  
着の身着のまま何一つなかった。今まで肩で風を切っ  
て歩いていた日本軍人に満人の子供たちが石を投げ、  
傍らに寄って来て唾を吐きかけても、何もすることが  
できなかつた。その夜、ソ連軍の戦車の大群は轟々た  
る地響きを立てながら、我々の目の前を通過して行っ  
た。彼らは、女性兵士の嬌声を交えながら戦車の上で  
酒を飲み、ブラスバンドで歌を歌い、狂気乱舞の言葉  
ピッタリのはしゃぎようであった。

人が人を殺し合って何ら罪悪感を感じない。いや、  
感じさせないようにコントロールさせられているのが  
戦争というものなのだろう。そして殺し合いに勝った